デジタル社会からアナログ社会への回帰

三浦　英生＊

21世紀の高度情報化通信社会において，アナログ回帰などと申し上げると時代錯誤とお叱りを頂戴しそうですが，日本におけるモノ創り再生を考えた場合，私はアナログ思考の大切さを痛感しています。現在の日本社会は基本的にはデジタル化に邁進していると言っても過言ではないでしょう。複数世代からなる大家族制がくずれて核家族化が進み，子供1人の家庭あるいは子供を持たない家庭や高齢独身者，さらには孤独高齢者の比率が急速に高まっています。地域社会も疎遠化が進み，いわゆる隣近所のお付き合いが消失しつつあるのはご存知のとおりです。一方で携帯電話やインターネットが急速に普及し，コミュニケーションのネットワークが世界中に広がっているような錯覚に陥りますが，実態は数少ない“仲間”の間の情報交換がほとんどで，むしろ個人の接する社会は局在化しているのではないでしょうか。

企業あるいは最近では大学においても，仕事の進め方がISOシステムの導入に代表されるようにマニュアル化が進み，いわゆる仕事の役割分担が強調されすぎるとともに，成果主義の導入で個々の争いも顕在化し，相互協力や協調などという概念が急速にしぼみつつあるように感じています。日本文化と欧米文化の比較として農耕社会と狩猟社会，漢字文化（二次元）とアルファベット文化（一次元），多神教と一神教など特徴的な比較論が展開されてきましたが，いずれの比較対象もアナログとデジタルという視点で共通性があるのではないかと考えています。物事をある意味単純化して白黒はっきりさせるのが欧米文化で，常にあいまい性や含みを残すのが日本文化だったと思います。これは欧米の機会均等が日本の平等とニュアンスが異なることと対応しています。また，欧米の互いを尊重するという文化は日本では義理人情の文化だったのだろうと思います。欧米の個人主義も日本では単なるわがままに変換されてしまっているようです。したがって，日本社会の急速なデジタル化は，これまで培ってきた日本文化の放棄という側面を含んでいることは否定できないと考えています。

実装の世界に目を向けますと，地球環境保護に基づき鉛フリー化が叫ばれ，材料システムの多様化が急速に進み，今は混沌から混乱の時代に移りつつあると言えそうです。メモリ製品が主役の少品種大量生産の時代からSiP (System in Package) に代表される多品種少量生産の時代に移行すると同時にこの材料システムの変革が始まっているので，性能と信頼性の両立，そしてコスト削減を求められる設計者にとっては受難の時代です。しかし一方では，設計者の実力が試される，またとない機会と考えることもできます。物事が複雑になるほど，実力差が見えにくくなりそうですが，むしろ真の実力が露わになるチャンスと考えるべきでしょう。自然界では粒の性質と波の性質がしっかり共存しています。日本文化の特長を再考し，複雑系におけるモノ創りでエレクトロニクス産業を再興させるには，必ずしもデジタル思考にばかり頼るのではなく，アナログ思考でからんだ糸を解きほぐす根気と忍耐力が必要なのではないでしょうか。0と1の間には無限の点（可能性）が潜んでいると思えると，自分ならではの居場所（オリジナリティー）も見つけやすく，難しい研究（仕事）に取り組む気持ちにも少しゆとりが生じてくると感じるのは私だけでしょうか。

＊当会理事／東北大学大学院工学研究科　エネルギー安全科学国際研究センター　教授